

きょうの

発言

彫刻家・中村晋也氏の「ミゼレー」シリーズは、1995年1月17日に起きた阪神淡路大震災の強烈な映像を見たことで生まれた。がれきのあちこちから火の手が上がり、70年前の空襲直後の東京と重なった、と中村氏は語っていた。

「何かしなければ…」と焦燥感を募らせるうちに、両手をダラリと下げ、足は大地から少し浮き上がり、全ての苦しみを抱

楠元 香代子 崇城大芸術学部教授

「祈り」のモニュメント

え昇天するかのような彫刻「ミゼレー」(救いたまえ)が生まれた。約3年間で矢継ぎ早にシリーズは作られ、18作目で一応の完結を見た。1作目の「ミゼレー」は震災の中心地、三ノ宮の駅前に建ち、復興を見守ってきた。3作目はキリスト教の総本山のバチカンにある。中村氏は戦没者の慰霊碑も数多く制作していて、その一つに「比島戦没者慰霊碑」がある。フィリピンから1900キロ離れた鹿児島県指宿市開聞町の花瀬海岸にあり、比島の戦没者47万6千余柱を慰霊する。「死生

の扉」と称する一対の石扉が、「この世」と「あの世」をつなぐ。門を越えれば比島に通じる美しい東シナ海が開け、「許されるものならば…」という書き出しの碑文が刻まれている。中村氏は「慰霊碑を作るときは、み霊が喜んでくださること」を第一に考える」と言い、碑のデザインや場所、方角などを丁寧に練るといふ。鹿児島市の中村晋也美術館では今、戦後70年を記念した企画展「70年目のレクイエム」が開かれており、約10カ所の慰霊碑と制作にまつわる思いが紹介されている。

2015.6.8